

テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』における場所と二神論の問題^①

津田 謙 治

序論

創造神と救済神との分離によって二神論を説いたマルキオン（八五頃—一六〇頃）^②は、一四四年頃にローマの教会から追放されたと言われている。この人物の教説を取り上げて、その細部に至るまで論駁を行った教父の一人がテルトゥリアヌス（一六〇／一七〇頃—二二二年以後）^③である。彼は恐らく二〇七年頃に、現在残されているかたちの『マルキオン反駁 (Adversus Marcionem)』第一巻を執筆し^④、最終的にこの書物は全五巻の大著となった。

本稿では、第一巻で取り上げられたマルキオンの多神論的枠組みに対する複数の批判の中から「場所 (locus)」

に関する議論に焦点を当てる^⑤。この議論によれば、マルキオンのように二神論を説くことは、何ものにも包括されない神と「場所」の関係から齟齬をきたすとテルトゥリアヌスは批判している。このような批判は直截的にはエイレナイオスに遡るものであるが、巨視的に捉えるならば、使徒教父の言説やアレクサンドリアのフィロンなどヘレニズム的ユダヤ人の議論の中にその萌芽を見出すことも可能である。

ここではテルトゥリアヌスのこの議論が含む問題を明らかにし、彼が著した他の反駁文書に含まれる「場所」の議論を分析することによって、この哲学的問題が含む特質が教父思想の中で持ち得た意義を浮彫にすることを試みる。

一 『マルキオン反駁』におけるテルトゥリアヌスの二神論批判

テルトゥリアヌスは『マルキオン反駁』⁵ 第一巻の中で、二神以上を想定する多神論を説くことの論理的矛盾を様々な視点から指摘している。この著作の前半部において、彼はまず神が如何なる存在であるかを明示した後、多神論を批判する。それによれば、神は至高の偉大さ (*summus magnus*) を備えていなければならないが、至高の偉大さはそれに比肩し得るような別の存在によってその特性を失う。即ち、並び立つ二つ (もしくは三つ以上) の至高の偉大さは成立せず、仮にそのような状態が起こり得るとすれば、それはもはや至高の偉大さとは言えない。それゆえに複数の神は存在し得ず、神の在り方は唯一でしかあり得ないとテルトゥリアヌスは指摘している。

一・一 「場所」概念を用いたテルトゥリアヌスの反駁

このような二神論批判の後に、テルトゥリアヌスは「場

所」に関わる議論を展開している。彼にとって、万物を造った創造者は唯一の神であり、地上的世界はこの創造神に属している。他方で、マルキオンにとって創造神は、他のグノーシスにおける見解と同様に、救い主とは異なる劣った神であり、彼にとつての救済は創造神とは別の神によって成し遂げられる。また、この創造神はキリストや他の神の存在について無知であったとされている⁶。こうしたことから、創造神が世界を創造するにあたって、別の神 (マルキオンの神もしくは救済神) のための居場所を捨てる必然性は最初からなかったであろうとテルトゥリアヌスは推断する。あらゆる被造物はその造り手に属する故に、創造者の造り出したすべての空間の中に、マルキオンの説くような別の神が存在する余地はない。

「したがって、もし宇宙が創造神に属するのであれば、もはや「創造神とは」他の神に属するような場所 [*locum*] を私 (テルトゥリアヌス) は見るこ
とができない。万物は自らの造り主によって満たされ [*plena*]、占有されている [*occupata*] からである。仮に創造神のもとで、何らかの神性のための何

らかの空隙 (aliquid spatii) が空いているとすれば、明らかにそれは偽りの〔神性の〕ために空いているのであろう」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』I.11.3)

ここでは、神によって造られたすべてのものが神自身によって満たされていることが確認されている。創造神が世界を創造したのであれば、世界はこの神によって満たされていなければならない。仮にマルキオンの神が創造神の世界の中に居場所をもつとすれば、偽りの前提(必然性のない、別の神のための空間)の上に、真理(神)が存在することになってしまったために、これは誤りであるとテルトゥリアヌスは指摘する。それでは、マルキオンの神は何処に存在すると捉えられるのであろうか。

一・二 「マルキオンの神」の位相

テルトゥリアヌスの解釈によれば、創造神の上方にマルキオンの神は鎮座している。この神は自らの世界に属し、その世界は創造神の頭上にあるとされている。極めて単純

明快にマルキオンの神の居場所が明らかになったが、この議論はテルトゥリアヌスが神の「場所」の問題を提示し、反駁を展開するための布石となっている。

「そこで、次に場所に関する問い (de loco quaestio) が〔上がるであろう〕。それはより優れた世界と、その〔マルキオンの〕神との両方に触れるものである。というのも、もしこの神もまた、自らの下方に〔infra se〕、そして創造神よりは上方に〔supra creatorem〕、自らの世界〔mundum suum〕を持つのであれば、自らの脚と創造神の頭との間に隙間〔spatium〕として空いている〔uacabat〕ような場所に、その世界を造ったのでなければならぬ。そのようにして、この神自身はこの場所の中に〔in loco〕いて、この場所の中で世界を造ったのであって、そしてこの場所は、この神やその世界よりも大きい〔maior et deo et mundo〕のである。というのも、それが含まれているものよりも、含んでいるものの方が広がりを持たないなどということはないからである。したがって、我々の見るべきことは、何か第三の神

[tertius...deus] が自らをその世界の間に割り込ませ得る、空隙 [subsistua] がそこに空いていないかどうかであろう」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』 I.15.2-3)

マルキオンの神が創造神の上方に自らの世界を持つとすれば、その世界を支える「場所」が存在しなければならぬ。これは、この神が自らの居場所を造るためのメタ的な「場所」であって、この「場所」がなければマルキオンの神は立つ位置を失い、また創造神とマルキオンの神とを隔てるものは何もない。隔てる空隙がなければ、神々は連続して一つとなり、区別することができなくなるであろう。

ここから次のような議論が導かれる。テルトゥリアヌスによれば、創造神もマルキオンの神も、神である限り永遠な存在として理解される。マルキオンの主張するようには、二つの永遠な神々が別個に存在してきたとすれば、両者を分割する隙間も永遠に存在してきたはずである。この隙間は、二つの神々を永遠に分割すると同時に、マルキオンの神が存在する「場所」を与え続けてきたために、神と見なされなければならない。

「それではこの神々を数え始めてみよう。というのも〔マルキオンにおいては〕場所もまた神であろうからである [Erit enim et locus deus]。それは単に神よりも大きいからというだけでなく、この〔マルキオンの〕神が常にその中にいたのであるから、生み出さず、造られず、神と常に共にあるが故に、神と等しく永遠であるからである」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』 I.15.3-4)

ここでは二つの視点から、マルキオンにおいては「場所」が神と見なされるべきであるとテルトゥリアヌスは主張している。一点目として、神が「場所」によって包まれており、包むものは包まれるものより偉大であるという理由から、「場所」が神以上の存在と見なされなければならないとされている。そして二点目として、テルトゥリアヌスは、神が「生み出されず、造られず、永遠なもの」^⑧であるという定義^⑨を用い、その定義に従って、マルキオンの神とその住処である天^⑩を永遠に内包する「場所」も神であると指摘している。テルトゥリアヌスの語法

(*op. cit.*) から推察すれば、恐らく実際には、マルキオン自身はこの「場所」を神とは見なしていなかったはずである。むしろ、この後に続く文章を見るならば、テルトゥリアヌスはマルキオンにおける神的存在を九つまで拡大して解釈しており(九神論)⁽¹⁾、「場所」を神と見なすことが相手の二神論を破綻させるための議論であったことが明らかになる。二神の存在を説けば、必然的に二神を隔てる「場所」としての第三の神のようなものが要請され、二神論に矛盾が生じるとテルトゥリアヌスは理解している。

二 テルトゥリアヌスの著作中における「場所」の議論の位置付け

このように「場所」によって敵対者の議論を批判する手法は、『マルキオン反駁』に特徴的なものと見なされるべきであろうか。ここでは、テルトゥリアヌスの幾つかの反駁書を分析することによって、彼の思想上においてこの議論を位置付けてみたい。

二・一 テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』における議論

テルトゥリアヌスが論駁した敵対者は多岐にわたるが、その中でもマルキオンのように二神論的な世界観を説いた思想家として、ヘルモゲネスが挙げられる。『マルキオン反駁』が執筆される直前に書かれたとされる『ヘルモゲネス反駁』⁽²⁾によれば、ヘルモゲネスは万物の材料となる質料を、創造神と共に永遠に存在するものと見なしており、このことからテルトゥリアヌスはヘルモゲネスが二神論を説いたと批判している。先の『マルキオン反駁』における議論と同様に、たとえ質料のように非人格的な存在であっても、テルトゥリアヌスによれば永遠なものとは神と見なされるべきだからである。

ヘルモゲネスの二神論を批判する際にも、テルトゥリアヌスは「場所」に関する議論を用いている。質料が神に包括されないならば、それは何処かの「場所」の中に位置付けられなければならない。

「お前〔ヘルモゲネス〕の錯誤を示すために、質料

の在り方について「()」までで考察してきたこと」と同様に、質料の位置 [de situ materiae] について考察してみよう。お前は神の下方に質料を位置付けている。「したがって、お前は」必然的に、神の下方にある質料に場所を [locum] 帰している。すなわち、質料は場所の中に [in loco] 在る。場所の中に在るとすれば、場所の内部 [intra locum] に在るのである。場所の内部に在るとすれば、「質料は」その内部に存在しているところの場所によって [a loco] 境界付けられている [determinatur]。もし境界付けられているとすれば、「質料は」外郭線 [lineam extremam] をもっている。その線は、画家 [であるお前] には専門のことであるが¹⁰、それが外郭線となるところのすべての事物にとつて、限界線 [lineam] であることをお前は知っている。したがって質料は、場所の中に在り、場所によって境界付けられている限り、限定されないもの [infinita] ではなく、また場所によって境界付けられる限り、外郭線によって場所を受けているのである。しかし「それにもかかわらず」、お前 [ヘルモゲネス] は、「質料は」限定されないも

の [infinita] である。というのも、それは常に存在しているのだから」と言うことによって、質料を限定されないものとしている」(テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』38:1-2)

ここでは「質料が無限定である」というヘルモゲネスの主張を否定するために、テルトゥリアヌスは「場所」の議論を用いている。質料が神の下方に位置付けられるならば、質料は「場所」に内包されている。下方という位相を問わないとしても、神とは別の「場所」に質料が在るとすれば、やはりそれは「場所」の中に存在すると捉えられる。その場合、「場所」と質料を区別する境界として、外郭線が質料を外側から縁取っている。この外郭線に囲まれている限り、質料が無限定であるというヘルモゲネスの主張は誤りであるとテルトゥリアヌスは指摘する。

さらにこの質料を取り囲む「場所」によって神と質料とが隔たっているとすれば、この「場所」は極めて大きなものとして捉えられなければならない。

「それでは、世界の創造以前に [ante mundi

molitionem)、神が質料からあまりにも離れていたの
で、質料の前に現前せず、それに近づぐこともないと
すれば、「質料を内包するような」その場所〔locus〕
はどれほど〔大きい〕であろう」(テルトゥリアヌス
『ヘルモゲネス反駁』44.3)

ヘルモゲネスは、神が質料に直接接触することなく、まるで磁石が離れた金属に影響を与えるように、神がただ質料の前に現前し、それに近づいただけで創造が行われたと理解している¹⁵⁾。その仮定に立つならば、創造以前に質料は、神の力が及ばない程に神から遠ざかっているなければならず、質料と神との間には相当の大きさの「場所」が要請されるべきであるとテルトゥリアヌスは述べている。

ここでは、既に『マルキオン反駁』で見たように、二つの永遠な存在を仮定するならば両者を隔てる「場所」が存在しなければならぬという議論が用いられている。「場所」は質料を内包し、神と質料との間を分かち間隙として理解される。『マルキオン反駁』において至高神と創造神との間を隔てたように、ここでもテルトゥリアヌスは「場所」を二つの永遠な存在を分け隔てるものとして捉えている。

る。ただし、マルキオンにおける議論と同様に、彼の敵対者自身(ヘルモゲネス)の主張からは直接「場所」についての言説は見出されず、テルトゥリアヌスが反駁を展開するために「場所」の議論を持ち出していることは確認すべき点である¹⁶⁾。

二・二 テルトウリアヌス『ブラクセアス反駁』における議論

他方で、『マルキオン反駁』よりも数年後に書かれた『ブラクセアス反駁』¹⁶⁾の中では、二神論とは別の文脈で「場所」が語られている。ブラクセアスは様態論者(モドウスのモナルキア主義者)であつて、神である「父」(自身)が生まれ、父が受難し、「この」全能の主である神自ら、イエス・キリストとして宣べ伝えられている¹⁷⁾と主張する。即ち父である神もキリストも、そして聖霊も、単一なる神が三つの異なった様態(modus)を取った顕現であるとブラクセアスは理解した。

テルトゥリアヌスが理解するヘルモゲネスやマルキオン、そしてウァレンティノスが多神論を説くこととは逆に、

プラクセアスは強固に一神論を説いている。しかし、その一神論はローマ教会の教説とは異なっており、父とキリストが区別されないというモナルキア主義の主張に対して、テルトゥリアヌスは「場所」の議論を用いて次のように反論している。

「というのも、万物の（創造の）前に神は単独 [solus] であつて、〔神〕自身にとつて、自らが世界であり、場所 [locus] であり、万物であつた。さて、単独であつたのは、この方を除いて他には外側に〔在るような〕 [extrinsecus] 何ものも〔存在し〕なかつたからである。それにもかかわらず、そのとき神は決して単独であつたわけではない。なぜなら、〔神〕自身の中に自らと共に持つていたもの、すなわち自らの理性を [rationem suam] 持つていたからである。というのも、神は理性的 [rationalis] であり、¹⁰ 理性はかつてこの方の中に在り、そのようにして万物はこの方自身に〔由来するからである〕。このような理性はこの方自身の意識 [sensus ipsius] である。この〔理性〕をギリシア人たちはロゴス

[λογος]〔である〕と述べており、この単語によって我々は『言葉』 [sermonem] を指し示している。さらにまた、この単語から、〔ギリシア語からの〕素朴な翻訳を通じて『言葉が最初に神と共に在った』 [sermonem...in primordio apud Deum fuisse] と述べることが我々にとつても一般化している。しかしむしろ、〔この〕『言葉』を〕より古い〔創造に先立つ〕理性 [rationem...antiquiorem] と見なすのがふさわしいであろう。というのも、神は最初から言葉的〔即ち言葉を發出していた〕 [sermonalis] であつたわけではないが、最初から理性的 [rationalis] ではあつたからである。また同様に、言葉は理性から生じるのであつて、その実体として理性が先立つことを示しているからである。……このようにして、私は偶然によらずに次のような結論を導くことができる。即ち、神が世界を創造する前において、〔この方は〕単独であつたのではなく、自分自身の中に理性を持つていたのであつて [habentem in semetipso...rationem]、この理性において言葉を〔持つていた〕。そしてこの〔言葉〕を、〔神は〕自らの内奥で働かせながら、

自らに由来する第二のもの⁽¹⁹⁾としたのである [in
ratione sermonem quem secundum a se faceret
agitando intra se] (テルトゥリアヌス『プラクセアス
反駁』5.2-3.6)

ここでは、一神論において神とキリストが区別される根拠が論じられている。神が万物の創造以前に唯独りで存在していたことは、プラクセアスにとってもテルトゥリアヌスにとっても同様に認められている。ここからプラクセアスはこの神の単独性の方に目を向けてモナルキア主義を主張するが、テルトゥリアヌスは単独の神が常に理性を伴っていた点を強調する。

この理性は、特にヘレニズム的思考の中では「ロゴス」と呼ばれているものであり、この単語がラテン語で「言葉」と訳された経緯から、ヨハネによる福音書の中でも「言葉が最初に神と共に在った」と解釈されるようになったとテルトゥリアヌスは理解する。しかし彼は、この表現をさらに正確に分析するならば、ヨハネによる福音書における「言葉(ロゴス)」はむしろ理性なのであって、「(神の)理性が最初に神と共に在った」と捉えることが相応し

いとしている。神の言葉は、この理性を基盤として流出したものであって、最初から在ったものではないことをテルトゥリアヌスは指摘している⁽²⁰⁾。

したがって、確かに神は最初単独であったが、神の内には理性が在り、この理性が言葉、すなわち子となったとテルトゥリアヌスは解釈する。神自身が「場所」であったのは、神の外側には何も存在せず、何ものにも包み込まれることはなかったからであり、そのことから、神自身がすべてであり、また世界でもあったと理解されている。

三 「神と場所」に関する議論の考察

ここで、ここまで見てきた神と「場所」に関する議論を整理し、それぞれの持つ議論の特性を考察してみたい。

まず本稿における議論の主軸となるテルトゥリアヌスの『マルキオン反駁』において、「場所」は神によって占有されるものと見なされており、また二神論的な枠組みの中では「場所」が二神を隔て、また取り囲むものとなることが指摘されていた。彼の『ヘルモゲネス反駁』においても議論は同様であり、「場所」は二神の一方である質料を内包

し、質料と神とを隔てるものとして議論が展開されていた。他方で、彼の『プラクセアス反駁』においては、神自身が世界であり、「場所」であることが述べられている。

三・一 包括と「場所」

存在者を外側から包み込むもの、即ち包括者が「場所」であるという議論がここまでの記述の中で見出された。ただし、この包括者としての「場所」という議論には二つの見方があるように思われる。

第一に、二つ以上の存在者があった場合、それらを取り囲む（もしくは分割する空隙として）さらに大きな存在者が必要となり、それが「場所」として議論されるのである。これは『マルキオン反駁』の中に見られる他では、エイレナイオスが同様の議論を行っている。これは、恐らくテルトゥリアヌスがエイレナイオスの反駁技法を踏襲したものと捉えられる。というのも、テルトゥリアヌスはこの「場所」を何か「第三の神」のようなものと見なしているが、エイレナイオスも同様に「第三のもの」（これらはアリストテレスの第三人間論のアポリアを想起させる）

として、二者を包み込む存在について論じているからである²¹。このような議論は多神論を切り崩すための手段の一つとして用いられている。

第二に、神は何ものにも包まれない、という議論である。これは、神をも包み込むような包括者としての場所は存在しないものであつて、ユステイノスやテオフィロスのような護教家神父たちの議論の中で明示的に語られている²²。神より大きな包括者は存在せず、したがって、神は「場所」の中には存在しない。

これらの議論はアリストテレスの場所論との関連が見出される。アリストテレスにおいて、「場所」は「包む物体の最端（面）」とされているが、それは存在者の外側を囲む端（固有の場所）である。これらの「場所」をさらに別の大きな「場所」が際限なく取り囲んでいくわけであるが、これは無限には続かず、万有を包み込むような（天の）最端（共通の場所）をアリストテレスは措定している。この最端の外側には空虚も何も存在しないため、この最端は何ものによっても包み込まれない²³。これは、特に二世紀後半から三世紀に活躍した神父たちの神観に符号するが、類似した議論は同時代の諸哲学にも見られるため、アリ

ストテレス独自の視点や影響であると見なすことは難しい⁽²⁴⁾。

三・二 神自らが「場所」

他方で、テルトゥリアヌスの記述の中には、神が「場所」に包括されるのではなく、神自身が「場所」そのものであるという理解もあった。特に、『プラクセアス反駁』では神が「場所」であると同時に万物と世界であることが語られている。ここでは二つの視点から議論を分析してみたい。

第一に、神が自らの「場所」であるという議論に関してである。これについては、神が何ものにも包括されないことから、神が自身を支える「場所」そのものでもあるという解釈が成り立つ。例えばアレクサンドリアのフィロンは、被造物に関しては包括されるものと包括するものは区別が必要と指摘しながらも、神的なものについては両者が同一のものと見なすべきであると指摘している⁽²⁵⁾。

第二に、神が「場所」、世界、そして万物でもあるというテルトゥリアヌスの議論についてである。これは『プラ

クセアス反駁』における表現であるが、上記の視点と同様のものと捉えられるかについては疑問である。神が万物と自らの「場所」であるという表現は、外側から存在者を取り囲むアリストテレス的な包括者の概念が前提とされていた。しかし、『プラクセアス反駁』における文脈では、世界の創造以前の状態において神が「場所」、世界、そして万物であると述べられている。神が「場所」であるということに関しては上記の視点と類似しているとしても、少なくとも、神が世界であり、万物であるという表現は被造物を外側から支えるような意味を指しているようには見えない。また、『マルキオン反駁』においては、被造物はその造り主によつて満たされ、占有されるとテルトゥリアヌスは述べている。これによつて、世界が神々によつて満たちあふれているとするヘレニズム的な世界観を思い起こすことも可能であるが、むしろ彼は、存在者によつて満たされた部分を「場所」と見なすストア派の思考に立っているように見える。

ストア派のクリュシッポスの考えとして伝えられている資料によれば、何かしらの物体が占有する領域は「場所」と呼ばれ、それが占有しない領域は「空虚」と呼ばれてい

る²⁶。このような議論は、包括者の概念よりもさらに物質的なものであり、神に関する議論とのつながりににおいて相応しいものであるか慎重に見ていく必要がある。ただし、『プラクセアス反駁』の中では、テルトゥリアヌスは神が神的な物体であると論じており²⁷、ストア派的な思考がテルトゥリアヌスの神観と「場所」概念に影響を与えている可能性も指摘され得る。これに関しては、神のロゴスとの関係からさらに考察を試みたい。

三・三 「場所」とロゴス

神と「場所」の関係を説明するものとして、例えばテオフィロスはロゴスの概念に触れながら議論を進めている。ロゴスは神であるが、神から生まれたものであって、神によって送り出されることによって神の姿で地上に現れるとテオフィロスは捉えている²⁸。この概念は、「場所」に包括されないはずの神が、被造物的世界の中に現れる（「場所」に内包される）という聖書の記述を読み解くためにここでは用いられている。

他方で、テルトゥリアヌスも『プラクセアス反駁』の中

でロゴスについて述べている。しかしその議論の文脈は、「場所」でもある神自身の中に創造以前より理性としてのロゴスが存在し²⁹、それが言葉として発せられたと主張することによって³⁰、神とロゴスを区別することに向けられている。

テルトゥリアヌスのこの議論の中で重要な点は、神とロゴス、即ち父と子が区別されながらも、それらが切り離されることなく一つであり続けているということである。それは太陽と太陽光線、泉と水の流れ、根と樹木に喩えられる。ここから、テルトゥリアヌスは父が実体のすべてであり、子はその全体の部分であると述べている³¹。

両者の議論を比較するならば、神と「場所」との関係において、テオフィロスはアリストテレス的な思考を前提としており、テルトゥリアヌスはそれとは異なり、ストア的な思考を前提としていることが見出される。テオフィロスにおいて父である神自身は「場所」によって包括されない³²と捉えられていたが、ロゴスは「場所」に内包されると説かれていた。テオフィロスの議論は、父である神の超越性を保持することに向けられており、ロゴスが現れたエデンの園を父が包み込んでいる限り、両者の分離は問題とはさ

れていない。しかし、テルトゥリアヌスの議論に照らすならば、テオフィロスにおける神とロゴスはある種の分離を想定せざるを得ない。一方が包み込まれず、他方が包み込まれる場合、両者は別々の存在である。というのも、万物を占有している神は確かに何もものにも包み込まれないが、この神から分離しないロゴスもまた、何もものにも包み込まれないはずだからである。したがって、テルトゥリアヌスのようにある種の物體的な神理解のもとでは、神とロゴスは切り離されることなく万物を満たしているような状態が想定される必要がある。父と子は世界と万物を占有しており、子だけが場所によって包括されるのではない。

四 結語

本稿では、テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』を手がかりとして、神と「場所」に関する議論を分析した。彼の用いた議論そのものは護教家神父たちや他の伝統に遡ることが指摘されたが、ストア的な文脈のもとで神と「場所」との関係を理解した点はテルトゥリアヌス独自の視点であることが示唆される。

「場所」の議論は、異端や異教の多神論的な枠組みを批判するのみならず、神とロゴスとの関係を再考する契機にもなり得た。特にテオフィロスはこの点に関する発展として、神とは異なつたロゴスの役割を明確にした。

テルトゥリアヌスは異なつたかたちでこの議論に触れ、神とは分離されない在り方でのロゴスの位置付けを模索した。このような議論が彼の三位一体の思考に影響を与えたことは多分に推察され得るが、これについては別の機会にて考察を続けたい。

注

(1) 本稿は、二〇一二年三月に第一三九回神父研究会において同名のタイトルのもとで発表した原稿を短くまとめ、部分的に議論を補足したものである。発表原稿においては、テルトゥリアヌスの議論を主軸として、殉教者ユスティノス、テオフィロス、エイレナイオスの三者の議論を比較し、考察を行った。本稿では、比較考察の部分の大半を割愛し、テルトゥリアヌスの行った議論を中心と

して扱う。尚、今回割愛した三者の護教家神父たちの議論は、特定質問者として御発題頂いた水落健治氏をはじめとして、同研究会で得られた貴重な意見を反映させながら、別の機会にて公にしたい。

- (2) 近年、Mollはマルキオンの生年を再検討し、八五年とされていた生年を一〇〇年頃に後退させている。議論の根拠は新資料に基づくものではなく、一四四年頃にローマにやって来たマルキオンがその数年後に独自の教会を建てたとすれば、八五年の生年であれば六〇歳近くのことになってしまい、それは不自然であるからとしている。もともと、六〇歳を過ぎて新たな活動を始めた人物はタレーヌなど古来より存在するので、このことが年代を再検討しなければならぬほどの要因になり得るかは疑問である。Sebastian Moll, *The Arch - Heretic Marcion, Wissenschaftliche Untersuchungen zum Neuen Testament* 250, Tübingen: Mohr Siebeck, 2010, p.26.

- (3) テルトゥリアヌスの年代に関しては、Habermehlの記述に従った。ただし、この後で触れる『プラクセアス反駁』が書かれたのは二二三年頃と考えられるので、彼の没年は二一三年以降と思われる。Peter Habermehl, "Artikel / Q. Septimius Florens Tertullianus", in: *Der Neue Pauly*, vol. 12/1, Stuttgart, 2002, S.173.

- (4) 『マルキオン反駁』については、第三版まで書き直した

とをテルトゥリアヌス自身の本の中で記している（『マルキオン反駁』11.11）。

- (5) ここで若干、この主題に関する研究史を俯瞰しておく。まず、教父文献において神論と「場所」の関係を論じている先行研究として、Grantと彼の研究を引き継いだSchoedelが挙げられる。特にSchoedelは教父の議論をフイロンや諸哲学の資料と比較しながら優れた分析を行っている。しかし、Grantが扱っているのは主としてアテナゴラスの議論のみであり、Schoedelの二つの論文においても、テルトゥリアヌスにおける「場所」に関する議論には殆ど触れられていない。Robert M. Grant, *The Early Christian Doctrine of God*, Charlottesville, 1966; William R. Schoedel, "'Topological" Theology and Some Monistic Tendencies in Gnosticism", in: *Essays on the Nag Hammadi Texts in Honour of Alexander Bohlig*, Martin Krause (ed.), Leiden: E. J. Brill, 1972, pp. 88-108; *ibid.*, "Enclosing, Not Enclosed: The Early Christian Doctrine of God", in: *Early Christian Literature and the Classical Intellectual Tradition*, in Honorem Robert M. Grant, William R. Schoedel and Robert L. Wilken (eds.), Paris: Editions Beauchesne, 1979, pp. 75-86. 次に、テルトゥリアヌスが『マルキオン反駁』において神と「場所」の関係について論じている箇所の内容について、BillとMejerlingのものがある。特に

Bill)の研究は一九一一年と古いものではあるが、テキストとその背景にある哲学的な問題について堅実な議論を展開している。August Bill, *Zur Erklärung und Textkritik des 1. Buches Tertullians "Adversus Marcionem"*, Leipzig: J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung, 1911; E. P. Mejerling, *Tertullian Contra Marcion: Gotteslehre in der Polemik Adversus Marcionem I-II*, Leiden: E. J. Brill, 1977. 最後に、本稿の著者は「場所」に関する議論について別の箇所でも扱っている。本稿はそれらの議論を踏まえた上で発展させたものである。拙論「場 (locus) と神の唯一性—反異端教父エイレナイオスの修辞学及び哲学的反駁—」、『日本の神学』第四七号、日本基督教学会編、二〇〇八年、一—三一—三二頁、同「アレクサンドリアのフィロンにおける「神的な場所」の問題—「夢」におけるヘレニズム哲学的な視点を中心として—」、『思想』第一〇五四号、岩波書店、二〇一二年、四八—六三頁。

(6) 本稿で用いるテキストは次のものである。Quintus Septimius Florens Tertullianus, *Opera Catholica Adversus Marcionem*, Aemilii Kroymann (ed.), CChrSl. 47, Turnholt, (1906), 1954, pp. 437-474; Tertullian, *Adversus Marcionem Books I-III*, E. Evans (ed.), OECT, Oxford, 1972; Tertullien, *Contre Marcion Livre I*, René Braun(ed.), SC. 365, Paris: Les Éditions du Cerf, 1990. また、本稿における文献の略

号は、TRE (Theologische Realenzyklopädie) の表記に準拠する。

(7) テルトウリアヌス『マルキオン反駁』I.11.9.尚、アダムの罪やサウロを王にしたことなど、先見性がないという意味での創造神の無知についてもマルキオンは指摘していたとされる(テルトウリアヌス『マルキオン反駁』II.23.1; II.24.1-6; II.25.1)。

(8) テルトウリアヌス『マルキオン反駁』I.11.3.ここでのテルトウリアヌスの文脈では、まさに創造によって創造者が神であることを人間は認めるのであって、創造もせずに隠れたままのマルキオンの神が果たしてどうして神と呼べるのだろうかという議論が行われている。

(9) テルトウリアヌス『マルキオン反駁』I.9.

(10) 神を定義するという表現は、後代の教理的問題に照らすと違和感があるが、人間の能力及ぶ範囲内という限定付きで、テルトウリアヌスは明示的に神を定義することについて述べている(『マルキオン反駁』I.3.2)。

(11) マルキオンはパウロの記述に従って(コリントの信徒への手紙II.12.2)「この天を「第三の天」(tertium caelum)と捉えている(『マルキオン反駁』I.12.2)。

(12) 『マルキオン反駁』I.15.4.6. ここで挙げられる九神は次のものである。(マルキオンの)神(天の)場所、(天の)質料(至高神の)キリスト、創造神、場所、質料、(創

造神の)キリスト、悪。

- (13) 本稿で用いるテキストは次のものである。Quintus Septimus Florens Tertullianus, *Opera Catholica Adversus Hermogenem*, Aemili Kroymann (ed.), CChSL. 47, Turnholt, (1906), 1954, pp. 395-435; Tertullien, *Contre Hermogène*, Frédéric Chapot(ed.), SC. 439, Paris: Les Éditions du Cerf, 1999. また、英訳と注釈の参照として Waszink のものを用了た。Tertullian, *The Treatise Against Hermogenes: Adversus Hermogenem*, J. H. Waszink (ed.), ACW. 24, N. Y.: Newman Press, 1956. 尚、Chapot はテルトゥリアヌスが『ヘルモゲネス反駁』を執筆した時期を二〇五年頃と推定している (p.12)。
- (14) 『ヘルモゲネス反駁』の冒頭で、ヘルモゲネスが画家であったことが述べられている。テルトゥリアヌスはここから、ヘルモゲネスが神の絵を描いて偶像崇拜を行い、神を冒瀆していると糾弾する(『ヘルモゲネス反駁』1.2)。
- (15) テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』44.1. 尚、自らは触れることなく質料から創造するという在り方は、アリストテレスの不動の動者を彷彿とさせる。ここには、質料のように無秩序なものに、神が直接触れると捉えることに対する忌避が見出される。このことから、例えばフィロンなどは、神と質料との間に中間者を想定し、それらが神のロゴスや神の諸力として理解されていたように思われる(アレクサンドリアのフィロン『律法詳論』I.328-329)。
- (16) Osborn によれば、プラトン主義的思考に強い影響を受けたヘルモゲネスが神と質料の二神論を説いたことに対し、ストア主義者であるテルトゥリアヌスが神の唯一性と創造者の超越性を擁護したものと理解される (Eric Osborn, *Tertullian: First Theologian of the West*, Cambridge, 1997, pp.190-191)。尚、テルトゥリアヌスはすべての著作を通じて様々な哲学者の学説に触れており、特に『魂について』の中では全面的にはないとしても、ストア派に対して極めて好意的である(「ストア派を用いて申し立てをする」と)(5.2)。「しばしば我々のものであるセネカ」(20.1)など)。また、テルトゥリアヌスの哲学的知識については、背後にドクソングラフィーの存在が指摘されているが、これに関しては Grant のものを参照。Robert M. Grant, "Two Notes on Tertullian", in: Vig. Chr. Vol.5 No.2, Leiden, 1951, pp.113-115.
- (17) 本稿で用いるテキストは次のものである。Quintus Septimus Florens Tertullianus, *Opera Montanistica Adversus Praxean*, Aemili Kroymann et Ern. Evans (eds.), CChr.SL. 47, Turnholt, (1906), 1954, pp. 1157-1205; Tertullian, *Tertullian's Treatise against Praxeas: The Text Edited, with an Introduction, Translation, and Commentary*,

Earnest Evans (ed.), Eugene, 1948. また、邦訳と注釈の参照として土岐氏のものを用いた。テルトゥリアヌス『プラクセアス反論』パツリウムについて』土岐正義訳、キリスト教教父著作集13、教文館、一九八七年。尚、土岐氏や Foster は『プラクセアス反駁』の執筆年代を二一三〔土岐氏の場合は恐らく誤記で一三三年の終わり頃と書かれているが〕年頃と見なしている（土岐（一九八七）一三三頁、Edgar G. Foster, *Angelomorphic Christology and the Exegesis of Psalm 8:5 in Tertullian's Adversus Praxean: An Examination of Tertullian's Reluctance to Attribute Angelic Properties to the Son of God*, Lanham, 2005, p. v)。

- (18) テルトゥリアヌス『プラクセアス反駁』2.1.1111では、いわゆる「父受難論」が説かれている。
- (19) Kroymann と Evans の校訂版によれば、この後ろの箇所では写本の欠損がある。
- (20) Evans はこの“secundum”を「別のもの」(another)としているが (Evans (1948), p.136) 1111では土岐氏の訳語に倣った。
- (21) したがって、言葉には始まりがあり、言葉としての子が存在しない時があったとテルトゥリアヌスは述べている (“Fuit autem tempus cum ei dictum et filius..”. 『クルモゲネス反駁』3.4)。cf. Marian Hillar, *From Logos to Trinity: The Evolution of Religious Beliefs from Pythagoras to Tertullian*, Cambridge, 2012, pp. 212-213.
- (22) エイレナイオス『異端反駁』II.1.3.
- (23) エステイノス『ユダヤ人トリュフォンとの対話』127.2; テオフィロス『アウトリュコスに宛てて』II.3.5-7.
- (24) アリストテレス『自然学』IV.4-5 (212a-212b)。¹ アリストテレスの議論については、拙論を参照。津田（二〇一一）五二—五三頁。
- (25) Schoedel はこの議論を、アリストテレスだけでなく、プラトンやエレア派、ストア派など様々な思想から分析を試みている (Schoedel (1972), pp.92-99)。
- (26) 「そして……万物を包括することから、神自身が場所と呼ばれている。〔神は〕如何なるものによっても包括されないだけでなく、あらゆる万物にとって自分たちが逃げ込む地である。なぜなら、この方は自らの場であるために、自らのために場を与えて、自らのためだけに〔場を〕導き入れたからである。……もちろん、包括されるものは、包括するものから区別される。しかし何ものによっても包括されない神的なものは、必然的に自ら自身の場所なのである」(アレクサンドリアのフィロン『夢』1.63-64)。
- (27) 『ストア派断片集』II.503-505 (Stoicorum Veterum Fragmenta, Ioannes ab Arnim (ed.), Vol. II, Stuttgart: Teubner, 1903, p.163; 『初期ストア派断片集』水落健治・

山口義久訳、京都大学学術出版会、二〇〇二年、五五七—五五八頁。

(28) テルトゥリアヌス『プラクセアス反駁』789. また、テルトゥリアヌスは『魂について』の中では魂も物体であると見なしている(95など)。受苦し、運動する魂は物体でなければならず、この議論はストア派との関係から導き出されるべきであろう。

(29) テオフィロス『アウトリュコスに宛てて』II 221-6.

(30) このような思考はアレクサンドリアのフィロンの中にも見出される(『世界の創造』17-24)。これについては、拙論を参照。津田(二〇一二)、五五—五六頁。

(31) この理性としての神に内在するロゴスと、神から発せられた言葉としてのロゴスという考え方は、ストア派におけるロゴス・エンディアテトスとロゴス・プロフォリコスとの関係に類比されるかも知れない。Cf. Osborn (1997), p.124; J. N. D. Kerler 『初期キリスト教教理史—使徒教父からニカイア公会議まで』拙訳、一麦出版社、二〇一〇年、一三二—一四頁。

(32) テルトゥリアヌス『プラクセアス反駁』8.4-9.2. cf. Hillar (2012), pp. 233-235.